

放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その6 おやつ量の自由度と食べる空間

A Study of Living Environment in Clubs for After School Activities for Children
— The flexibility of the amount of snacks and places to eat —

秋 武 由 子

Yoshiko AKITAKE
福岡教育大学非常勤講師

柳 田 あやの

Ayano YANAGIDA
福岡教育大学卒業生

鈴 木 佐 代

Sayo SUZUKI
福岡教育大学家政教育講座

豊 増 美 喜

Miki TOYOMASU
大分大学大学院工学研究科

(平成26年9月30日受理)

Keywords : clubs for after school activities for children 放課後児童クラブ, after-school child care center
児童保育所, snacks おやつ, child 子ども

1 諸言

放課後児童クラブは、留守家庭児童が放課後や長期休暇中を過ごす生活の場であることから、児童が栄養を補い、楽しい時間を過ごすために、おやつが提供されている¹⁾。おやつは、宿題、遊びとともにクラブの一日の生活のなかに位置づけられている。クラブのおやつ提供の状況は、全国学童保育連絡協議会によると96.3%と非常に高い²⁾。

対象児童の拡大^{注1)}により低学年児童から高学年児童までがともに過ごすクラブにおいて、おやつの適量は個々によって大きく異なる。また、その日の体調等によっても食べる量は変わってくる。児童がおやつを食べることを、不満や負担に感じることなく過ごすためには、児童が自分に見合ったおやつ量を選択できる環境は重要であると考え。高橋らも「児童が自分に合った適量を

食べられるような環境づくりが必要³⁾と述べている。

また、筆者らは放課後児童クラブのおやつについて既報でKI市の放課後児童クラブを対象に、提供されているおやつの内容や、おやつに対する指導員と保護者の意識、手作りおやつの実施状況と台所空間の実態を明らかとした⁴⁾。その中で、おやつに対する指導員と保護者の意識をみると、指導員、保護者ともに放課後児童クラブのおやつの役割として「楽しい時間の共有」(指導員72.7%, 保護者86.9%)や「気分転換や休息」(指導員65.5%, 保護者72.0%)を重視していた。指導員、保護者ともに50%を超えていたのはこの2項目のみであった。「楽しい時間の共有」、「気分転換や休息」といった役割を持つおやつのための空間は、喧騒感がなく、落ち着ける環境であることが必要であると考え。

そこで本報では、福岡県 KA 市の放課後児童クラブ（以下クラブと称す）を対象に、おやつを食べる環境について検討するため、おやつに対する指導員の考え、おやつの量の自由度、おやつ時の空間づくりについて、児童と指導員の行動観察調査および指導員へのヒアリング調査より実態を把握する。

2 調査及び調査対象の概要

調査対象施設の概要と、調査概要、調査対象施設の空間構成の特徴は前報「その5」⁵⁾に示す。

3 結果および考察

(1) おやつに対する指導員の考え

おやつに対する指導員の考えを表1に示す。「コミュニケーションがとれる場・時間」(①, ②, ③, ④, ⑤, ⑥)が最も多く、次いで「楽しく」(①, ④, ⑦)であった。「学校からクラブに切り替わる時間、ゆっくり、ほっとなるように過ごしてほしい」(⑧)や、「ゆっくり過ごせる場所、団らんでできる場所、安らげる場所」(⑨),「落ち着いて食べてほしい」(⑤)も含め、クラブでのおやつの時間はコミュニケーションがとれ楽しく、落ち着ける時間であってほしいと考える指導員が多かった。これは高橋らの「重要なのは、児童にとっておやつの時間が楽しいことや、落ち着ける場であるかである。」³⁾という記述や、既報⁴⁾の指導員、保護者の考えとも一致するものである。

また、「第2の家なので」(⑥),「家庭の延長なので」(⑩)という回答があり、指導員は家庭的な雰囲気の中でおやつを食べてほしいと考えている。

「きちんと座ることなどが正しくできるようにしている」(⑩),「最低限のルールを守りながら」(③)などマナーを守ることも挙げられ、教育的

役割も必要だと考えていることが窺える。

(2) おやつ時における自由度

1) おやつを食べない選択と食べない児童の過ごし方

児童がおやつを食べないことを選択できるか否かと、食べない理由、食べない児童の過ごし方、居場所を表2に示す。

食べないことを選択できるのは12施設中5施設であり、おやつは全員が食べるという施設の方が多かった。

選択できる施設において、児童がおやつを食べない理由は、「提供されたおやつの内容が不満な場合」(b, e),「おやつより他のことを優先したい場合」(b, f),「精神的におやつを食べたくない場合」(h, k),「食自体に興味がない場合」(e)などであった。

おやつを食べない児童の過ごし方は、「おしゃべり」(b, e, h),「宿題」(e, f),「読書」(e, k)などの「座った行為」であり、うろうろするなどの「動く行為」⁶⁾は見られなかった。

おやつの時間中、おやつを食べない児童は外遊びに出ることは出来ず、全5施設、おやつを食べている児童と同じ部屋、または同じ長机やテーブルで過ごしていることが多かった。

このようにおやつを食べない選択ができる施設においても、おやつを食べる児童と一緒に過ごさせて、おやつの空間を共有できるようにしている。

2) おやつの量の選択

児童がおやつの量を選択できるかを表3に示す。全ての施設において児童はおやつの量を選択でき、増減どちらもできるのは4施設(c, d, e, i), 減らすのみできるのは8施設であった。

また、全ての施設でおやつを残すことができる。

表1 おやつの時間に対する指導員の考え

	指導員の考え
①	楽しく過ごす。コミュニケーションをとる時間。
②	他学年ともコミュニケーションがとれればいい。
③	最低限のルールを守りながら、コミュニケーションを図る場。
④	皆でおいしく、楽しく、コミュニケーションがとれる場。
⑤	ゆっくりコミュニケーションをとりながら食べてほしいが、早く遊びたいためにそれができていない。もっと落ち着いて食べてほしい。
⑥	第2の家なので、兄弟・家族のようにコミュニケーションをとりながら過ごせる時間
⑦	皆揃う時間なので、楽しく過ごしてほしい。
⑧	学校からクラブに切り替わる時間、ゆっくり、ほっとなるように過ごしてほしい。
⑨	ゆっくり過ごせる場所、団らんでできる場所、安らげる場所。
⑩	家庭の延長なので、きちんと座ることなどが正しくできるようにしている。
⑪	食事と一緒に、楽しく好き嫌いなく食べてほしい。

表2 おやつを食べない選択の有無と食べない理由及び過ごし方

クラブ名	食べない選択の有無	食べない理由 (具合が悪い時を除く)	過ごし方	過ごす場所
a	無	-	-	-
b	有	おやつが好みじゃない 早く遊びたい	おやつを食べている児童と おしゃべりなど	おやつを食べている児童と 同じ長机やテーブル
c	無	-	-	-
d	無	-	-	-
e	有	おやつが好みでない 食に興味がない児童が、い らないというとき	宿題や読書, おやつを食 べている児童とおしゃべりなど	おやつを食べている児童と 同じ部屋, または別の部屋
f	有	宿題をしたい	宿題	おやつを食べている児童と 同じ部屋, または別の部屋
g	無	-	-	-
h	有	気分が乗らない	おしゃべりなど	おやつを食べている児童と 同じ長机やテーブル
i	無	-	-	-
j	無	-	-	-
k	有	嫌なことがあった	読書	おやつを食べている児童と 別の部屋
l	無	-	-	-

表3 おやつ量の選択

クラブ名	もらうときに量の 増減ができるか		おやつを 残すことが できるか	おかわりの有無	おかわりをもらえるタイミング		
	増	減			食べ 始める前	途中	食べ 終わって
a		○	○	残りがあれば有		○	○
b		○	○	残りがあれば有			○
c	○	○	○	有		○	○
d	○	○	○	残りがあれば有			○
e	○	○	○	残りがあれば有	○		
f		○	○	残りがあれば有		○	
g		○	○	残りがあれば有		○	
h		○	○	残りがあれば有		○	○
i	○	○	○	残りがあれば有			○
j		○	○	残りがあれば有			○
k		○	○	残りがあれば有		○	○
l		○	○	残りがあれば有		○	○

おかわりについては、「できる」が1施設(c)、「残りがあればできる」が11施設であった。おかわりのタイミングは「食べ始める前」、「途中」、「食べ終わって」と様々であるが、全ての施設が可能な限りおやつを増やすことに対応している。

「減らすのみできる」、「残りがあればできる」など制約はあるが、児童が自らおやつを決めることができる環境となっている。

(3) おやつ時の空間づくり

1) おやつ時の集団規模と場所

対象施設では、「子どもを長く待たせないよう

に、子どもが指導員の話をしちんと聞くことができるように」などの理由からおやつは1~3グループに分けて行われている⁵⁾。おやつ時の児童の集団規模と使用する部屋を表4に示す。なお、調査対象施設には、図1のような(A)~(F)の部屋があり、1階は約30m²の部屋が4室、2階は約20~30m²の部屋が2室ある。

グループ分けについては、登録児童数が40人未満の4施設(d, e, g, k)ではグループ分けを行っていない。40人以上の8施設では2~3グループに分け、1グループあたりの登録児童数を19~39.5人としている。複数のグループにわ

けるか否かは、1グループ40人未満を基準としていることが推察され、放課後児童クラブガイドライン⁷⁾の「おおむね40人程度」とも一致する。また、a, 1の2施設は「いただきます」の挨拶をして食べ始めるグループを、更に小さく分けており、おやつを受け取ってから児童を長く待たせることがないよう配慮していることが窺える。

おやつ時の部屋の使い方については、登録児童数が40人未満の施設はdを除く3施設(g, k,

e)が1階の2室を使用し、40人以上の施設は1, 2階の3~4室を使用していた。おやつ時に2階を使用するには、指導員を2階にも配置しなければならず、また階段を使っておやつや食器等を運ぶなどの作業を要する。しかし対象施設では、調査日に児童数が40人未満であっても(l, j, a), 児童を1階の部屋にまとめることなく通常通り、2階の部屋も使用していた。北浦らは『私の席』を持つことで「それが子どもの精神的な安定を支

表4 おやつ時の児童の集団規模と使用部屋

クラブ名	登録児童数	おやつ形態		おやつ時に使用する部屋(網掛け部分)					
		グループ数	1グループあたりの児童数	A	B	C	D	E	F
g	31	1	31		23				
k	37	1	37			25			
e	37	1	37			23			
d	38	1	38			32			
l	49	2 *	24.5		19				18
j	56	2	28			17			11
c	57	3	19			16	12		13
b	57	2	28.5			25		0	
f	64	2	32			**8	14		23
i	70	2	35			21		0	
a	71	3 *	23.7		16		5		17
h	79	2	39.5			36		24	

*) おやつ開始時のみ、lクラブは2グループを各5班(1班あたりの児童数4.9人)に分け、aクラブは3グループを5班・3班・4班(1班あたりの児童数5.9人)に分け、小規模集団で活動する。

**) 白地部分は、普段は使用しないが調査日は使用していることを示す。

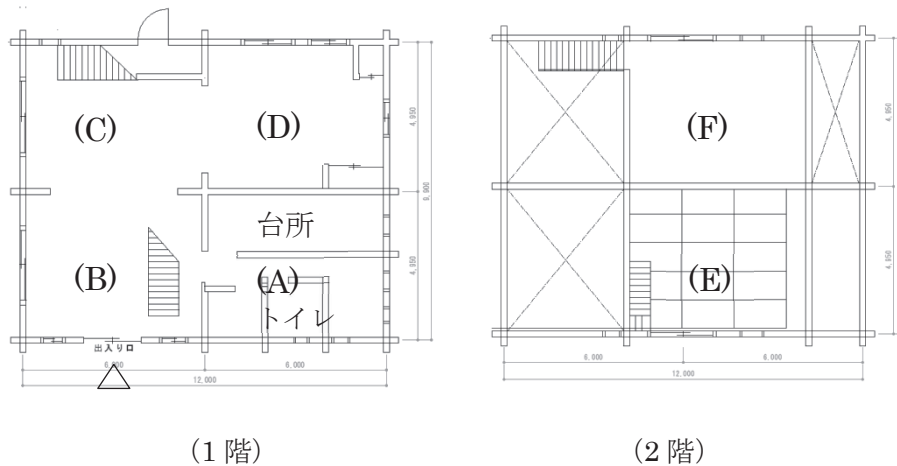


図1 調査対象施設の平面図の例 (fクラブ)

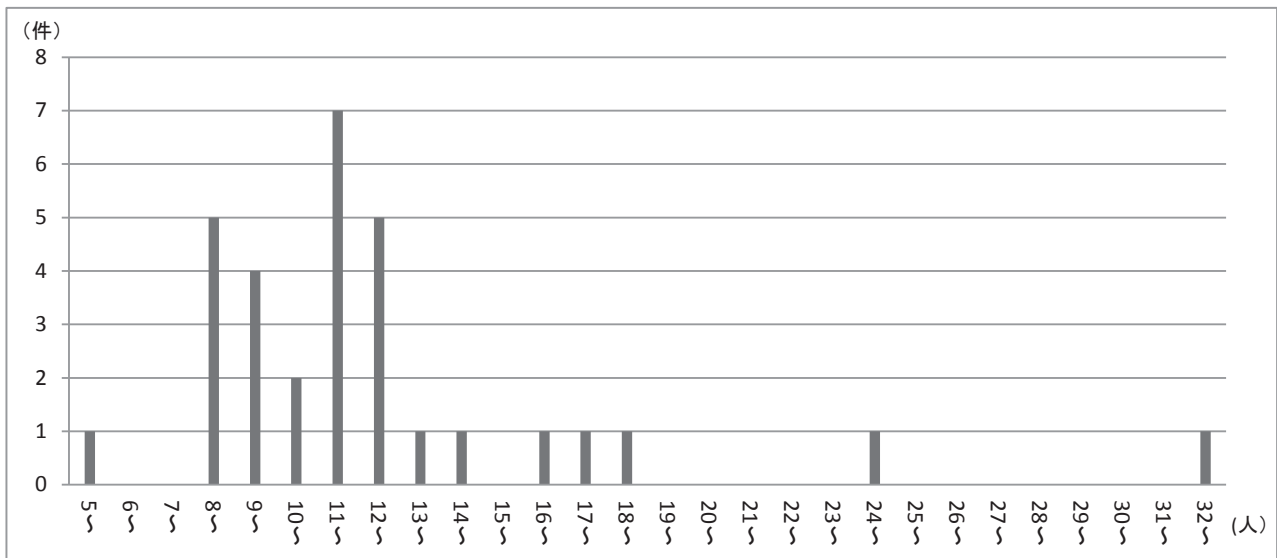


図2 おやつ時の1室あたりの児童数

え家庭的な雰囲気をつくりだしている。」⁸⁾と述べており、児童にとっていつも同じ場所でおやつを食べるということは、自分の場所を持つことにつながり、クラブやグループに対して帰属意識や愛着が生まれると考えられる。

2) おやつ時の1室あたりの児童数

調査日に観察された、1グループあたりの児童数は、表4に示すように様々であるが、16～25人が多い。1グループで1室使用する例はのべ11例、児童数は5～32人であった。1グループ2室使用はのべ10例あり、1グループの人数は16～36人であるが、2室使用により1室あたり18人以下に抑えていた。

おやつ時の1室あたりの児童数を図2に示す。1室あたりの児童数は最少が5人、最大が32人であった。20人以上は2件あり多人数で食べている例はあるが、1室あたりの児童数は8～12人が多くみられた。

4 まとめ

おやつを食べる環境について検討するため、福岡県KA市の放課後児童クラブの12施設を対象に、おやつについての指導員の考え、おやつ量の自由度及びおやつ時の空間づくりについて実態把握を行った。得られた結果を以下にまとめる。

- 1) 指導員は、クラブのおやつ時間が児童にとって、コミュニケーションがとれ楽しく、落ち着ける時間であってほしいと考えていることが明らかとなった。その実現には、クラ

ブのおやつ時間は喧騒感のない、落ち着いた環境が必要であると考えられる。

- 2) おやつ時における児童の自由度について、「おやつを食べない選択と過ごし方」、「おやつ量の選択」の観点から分析を行った。食べないことを選択できるのは12施設中5施設で、できない施設の方が多かった。食べない児童は、室内で、おしゃべりや宿題など座っておやつを食べている児童とともにおやつ時間を過ごす。おやつ量の選択については、「減らすのみできる」、「残りがあればできる」など制約はあるが、児童が自らおやつ量を決めることができる環境となっていた。
- 3) 対象施設では指導員の指示の伝わりやすさ、児童の待ち時間の短縮、喧騒感の回避などを考慮して、おやつ時間の児童の集団規模を40人以下にしていた。1グループあたり1～2室を使用し、調査日の1室あたりの児童数は8～12人が多くみられた。また、いつも同じ場所でおやつを食べることで、精神的な安定や、帰属意識、愛着を生み、そこが児童の落ち着ける場となると考えられる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 25350048 の助成を受けたものです。

調査に協力していただいた対象施設の皆様に記して感謝の意を表します。

注記

- 1) 平成24年8月の児童福祉法の改正により第六条の三第二項中の「おおむね十歳未満の」が削られ、十歳以上の高学年も対象児童となる。

引用文献

- 1) 全国学童保育連絡協議会「テキスト学童保育指導員の仕事」p.18 (2010年)
- 2) 全国学童保育連絡協議会「学童保育の実態と課題 2012年版実態調査のまとめ」p.93 (2013年)
- 3) 高橋比呂映・平本福子「宮城県の学童保育におけるおやつ現状と課題」宮城学院女子大学生生活環境科学研究所研究報告, 第46号, pp.33-42 (2014年3月)
- 4) 秋武由子・岡俊江 他「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その2 北九州市の放課後児童クラブにおけるおやつ現状

と課題」福岡教育大学紀要, 第60号, 第5分冊, pp.207-213 (2011年2月)

- 5) 鈴木佐代・柳田あやの 他「放課後児童クラブの生活環境整備に関する研究 その5 落ち着きを確保するための指導員による環境づくり」福岡教育大学紀要, 第64号, 第5分冊, 印刷中 (2015年2月)
- 6) 清水肇「学童保育施設における子どもの生活行為の特性と空間構成との関係」日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿), pp.361-362 (2014年9月)
- 7) 厚生労働省「放課後児童クラブガイドラインについて (平成19年10月19日付雇児発第1019001号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知)」厚生労働省ホームページ
- 8) 北浦かほる・木下千絵 他「保育環境としての子どもの生活空間の検討—夜間保育所の保育環境整備に向けて(2)—」日本建築学会計画系論文集, 第568号, pp.33-40 (2003年6月)